

***まず、アフガニスタンとの出会いをお聞かせください。**

西垣 もともと仏教や仏教美術に興味がありました。今ではヒンズー教やイスラム教の国になっていますが、仏教発祥の地インドへ旅した三蔵法師への憧れを持っていましたし、アフガニスタンの土臭く温かみのある刺繍の美しさにも惹かれました。また、商社マンとしてイランに長く駐在していた叔父が退職後始めた骨董屋を手伝い、イスラム美術品を身近に触れていました。

西垣さんの頭を離れることのなかった宗教や仏教美術への興味。それは後に、二人目の子どもを妊娠中にもかかわらず、佛教学の通信教育受講へと繋がっていきます。さらに46歳で神戸大学文学部へ学士入学、史学科で東洋史を専攻し、中央アジア仏教美術史を本格的に学びました。



***「宝塚・アフガニスタン友好協会」設立のきっかけは？**

西垣 東京でアフガニスタン大使館の写真展を見たとき、その現実には衝撃を受けました。アフガニスタンは1979年に旧ソ連が侵攻し、撤退後は内戦状態になり、首都カブールに近い国内避難民キャンプでは赤ん坊のミルク不足が深刻だと聞きました。後先考えず、思わずその場で大使館の方に「どうしても自分の住む宝塚でこの写真展を催したい」と頼んでいました。急な申し出に驚きながらも代理大使だったその方は初対面の私に写真の貸し出しを承諾してくれたのです。

ちょうどお昼時、その日は誘われるまま一緒にアフガニスタン料理を床の上で頂く初めての体験もしました。

宝塚に戻った西垣さんは、早速、宝塚市立国際・文化センターへ写真展の申し込みに行きました。ギャラリー使用料の3万円を握りしめて。話をきいてくれた館長から奨められ「宝塚・アフガニスタン友好協会」を設立し、「協会の代表」になりました。写真展は宝塚市の主催で開催、「主婦が一歩を踏み出した」瞬間でした。

***「宝塚・アフガニスタン友好協会」を立ち上げる前にイギリスへ主婦留学されていますね。**

西垣 映画配給会社で働いていたときに、夫と知り合い、結婚。家事・育児は一手に引き受けてきました。ですから、主婦で学生を兼ねていたころは、寝ないで勉強した時期もあります。でも学ぶこと知ること、更に美術や宗教への関心は深まってい



女だからできたこと

—アフガニスタンとわたし—

「宝塚・アフガニスタン友好協会」代表の西垣敬子さんは、14年にわたって、アフガニスタンの女性や子どもたちへの支援活動を続けています。難民キャンプへ赤ちゃんのミルクを届けたいとアフガニスタンへ飛び立ったのがきっかけで、学校用テントや学用品などきめ細かな支援を続け、今回、大学に女子寮を建設する大事業を手掛けました。今年3月には、完成した大学の女子寮を訪問し、女子学生たちに会ってきた西垣さんにお話を聞きました。

西垣 敬子 さん

宝塚市在住。1935年(昭和10年)、台湾生まれ。1994年1月 宝塚・アフガニスタン友好協会設立。4月に「アフガニスタン展」を宝塚市主催で開催。11月アフガニスタンに入る。内戦下の国内避難民キャンプ訪問。以後毎年、定期的に同国を訪問。手回しミシンを持って難民キャンプで裁縫教室開設。タリバン時代の隠れ学校の女性教師の給料支援。ナンガルハル大学に女子トイレ建設、グラント整備、サッカー場建設、井戸を掘るなどの支援。2007年同大学に女子寮建設。息の長い支援を続けている。



写真：西垣敬子さん提供

***アフガニスタン女性の生活はどんな状況でしょう？**

西垣 イスラムの国では女性は虐げられた影のような存在。存在感がないのです。避難民キャンプでは、女性が配給の列に並んで水などを手に入れることはできません。家族の中の男性、たとえ幼児でも“男”だけが配給を受けられます。

また、女性議員の発言に対して、男性議員が「だまれ」とスリッパで顔を殴るようなこともあります。女性の職業は教師と医師などきわめて限られています。男性の意識を変えるには100年かかるのではとため息が出ます。

***タリバン政権時代、女性は就学・就職を禁止されました。女子教育の現状と女子寮建設について教えてください。**

西垣 アフガニスタンでは女性の識字率は13.5%、男性は45.2%といわれています。小学校から大学まで教育費は無料で、教科書も配給されます。しかし、貧困のため子どもたちも働かないと家族全体が食べていけません。学校へいけない子どもが多いのです。

そのような現状で、なんとか高校まで通学してきた女子学生も、地方では大学進学を諦めざるをえません。自宅通学できない女子学生のために、現地から大学の女子寮建設を頼まれました。しかし、寮の建設資金となると個人が担える額ではありま



せん。自分にはとうてい実現できないと感じながらも、講演会で訴え続けて3年、ある団体から700万円の寄付の申し出がありました。それまでの募金300万円。思いもかけず、毎日新聞社の「毎日国際交流賞」を受賞、いただいた賞金250万円を合わせ、大学の女子寮建設が実現しました。

***安全と男女平等の法律をもつ国で私たちが自らの暮らしをみつめ直すためには？**

西垣 私の講演会に来る人は、何かをしたいけれど迷っている方が多く、私の生き方に共感し背中を押された、励みになったと言われるのはうれしいです。私は以前から「何かしたい。もっと知りたい。自分を高めたい」「子育てだけで朽ちていくのは嫌だ」と思っていて、手探り状態でした。でも見つけた道を進んでいけば人と出会い、ものごとは広がっていくのだと思います。

私は直感人間で、あまり深く考えないところもあります。走りながら考えることもあるくらい。よく失敗もします。失敗から学ぶことは多く、失敗ほど貴重なものはありません。人としての温かみでもますから。だから失敗した人は大好きです。私は台湾からの引き揚げ経験者でもあり、何が起きてもびっくりしないところもあります。

私のモットーは3K。(失敗しても)懲りない、(こうじゃなきゃだめだと)こだわらない、(権力や地位に)媚びない。今までこれはやってきたと思います。女でこの年だからできることもあると思います。

いろいろな場面でいい出会いに恵まれ、出会った人たちに導かれたと語る西垣さん。主婦だから母だから妻だから女だからにとられることなく、自分の気持ちにまっすぐ向きあい、銜わずにやってみる自由力と、大胆にもみえる行動力。73歳、透きとおった瞳が世界を見つめているようでした。

